

平成24年度

調査研究助成事業報告書

全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会

「近隣教育機関との連携による地域ネットワークづくり」

目次

1	はじめに	1
2	調布特別支援学校の概要	1
3	PTAと「リソース・ネット」	2
3-1	リソース・ネットの成り立ち	2
3-2	PTAの役割	4
3-3	実効性のある活動とするために	4
4	事業計画	6
5	事業の詳細	7
5-1	「日常の支援」を根付かせる活動	7
5-1-1	じゃんけんPON！	7
5-1-2	電気通信大学学園祭見学	8
5-1-3	ドッジビー講座	9
5-1-4	公開講座「ボランティア養成講座」	10
5-1-5	広報パンフレットの制作	11
5-2	災害などの「非常時に備える」活動	12
5-2-1	「たすけてカード」の制作	12
5-2-2	防災教育研修会	15
5-2-3	非常食体験★	16
5-2-4	避難所設営・避難所体験	18
6	総括	19
6-1	成果	20
6-2	課題	21
7	おわりに	22
添付資料 1	啓発パンフレット「知ってください わたしたちはここにいます」	23
添付資料 2	たすけてカードの内容（初版）	25
添付資料 3	たすけてカード啓発パンフレット	27

「近隣教育機関との連携による地域ネットワークづくり」

1 はじめに

東京都立調布特別支援学校 P T A では、「近隣教育機関との連携による地域ネットワークづくり」として、P T A 、学校、至近な位置にある国立大学、市立小学校関連団体等と連携した団体（リソース・ネット）を通じて知的障害児及び知的障害児が通う学校への地域の理解と支援の普及を目指す諸活動を、全知 P 連の調査研究助成金の交付を受けて実施いたしました。本稿ではその事業内容と成果・課題についてご報告いたします。

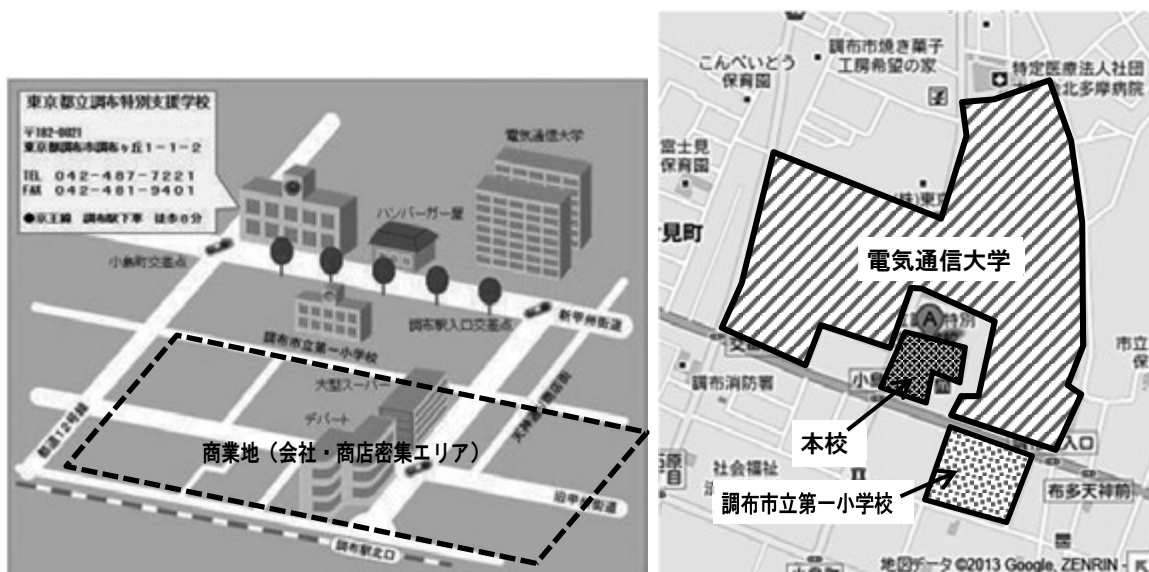
2 調布特別支援学校の概要

調布特別支援学校（以下、「本校」と表記）は、調布市の中心に位置する知的障害教育部門の特別支援学校で、小学部、中学部があり、平成 24 年度現在、合わせて 150 名ほどの児童・生徒が通学しています。

本校の学区は調布、三鷹、狛江の 3 市、いずれも多摩地区の南東部に位置する住宅街の広がる一帯です。交通の便がよく、都心に通勤する会社員世帯が多い地域でもあります。

また、本校は、京王線調布駅からほど近く、国道 20 号（甲州街道）という交通量の非常に多い幹線道路に面しています。周辺は商店や企業の営業所などが多い地域です。周りを国立大学法人電気通信大学（以下「電気通信大学」と表記）のキャンパスに囲まれるようにして建っており、国道をはさんではす向かいには調布市立第一小学校があります。

この地理的・環境的条件が今回の調査研究助成事業と大きくかかわっています。



◆本校の立地と周辺 3 校の位置関係

3 P T A と「リソース・ネット」

助成事業の実施の中心となる「リソース・ネット」とは、本校と隣接する電気通信大学との提携を軸に平成 21 年に設立された任意団体で、本校の児童・生徒を多方面から支援する方策を考え実践する活動をしています。

P T A はその設立前の段階から一貫して、児童・生徒とその家庭への理解や支援を求める立場から、保護者の立場を代表して参画してきました。

ここでは、リソース・ネットの成立経緯と、そのなかで P T A が果たしている役割についてご説明します。

3-1 リソース・ネットの成り立ち

平成 16 年	調布特別支援学校 P T A 内にサポーター事務局を設置し、ボランティアによる児童・生徒に対する支援活動がスタート。
平成 20 年	調布特別支援学校が東京都教育委員会のモデル事業の指定を受け、「外部の教育資源を活用した教育支援事業」に向けた仕組みづくり委員会を発足。
平成 21 年 10 月	調布特別支援学校と電気通信大学との間で教育連携協定を締結。仕組みづくり委員会の検討を経て、リソース・ネット設立。

本校を取り囲むようにして立地する電気通信大学と本校とは、それまで校外活動の場所として利用させていただいたり、一部の学生がボランティア活動をする程度のごく限定的な交流があるのみで、せつかく間近にあるにもかかわらず双方の「連携」については発想がない状態でした。

そんな中、平成 20 年度に東京都教育委員会「東京都教育ビジョン（第 2 次）」（平成 20 年 5 月策定）による「外部の教育資源を活用した教育支援事業」の実施モデル校として指定されたことから、その仕組みづくり委員会に電気通信大学からもご参加をいただきました。

いっぽう、電気通信大学の側でも、文部科学省が平成 14 年度の新規事業として大学の地域貢献の支援に乗り出し、自治体と連携する国立大学を直接支援する事業と、大学を活用した町づくりに取り組む自治体を支援する事業をセットで展開。「開かれた大学」に向けた体制整備を促す、という動きがありました。

このように、双方の目指すものが一致した結果、学校間で教育連携協定を締結するに至り（※1）、その提携の力を「障害のある子どもたちの支援」に生かすために、両校代表に加え、児童・生徒の保護者を代表する P T A と、支援者の立場から P T A 登録サポーター（後述）の代表も参加して、平成 21 年、任意団体「リソース・ネット」が設立されました。

運営メンバーは、本校教員、電気通信大学教員・学生、保護者（P T A 代表）、地域住民、サポーター、卒業生保護者によって構成され、委員長は電気通信大学准教授深澤浩洋先生（初代：肩書は在任当時）、同水戸和幸先生（現任）が務めています。

「いっしょうふれあいネットワーク」の参加

はす向かいにある調布市立第一小学校とは、これまでも交流教育などで交流することがありましたが、調布市が進める地区協議会事業（小学校区をひとつのコミュニティエリアとして、地域の活動団体や個人を結んだネットワーク組織）の団体である「いっしょうふれあいネットワーク」のメンバーが、地域ネットワークづくりの一環として平成 23 年度からリソース・ネットに参加しました。

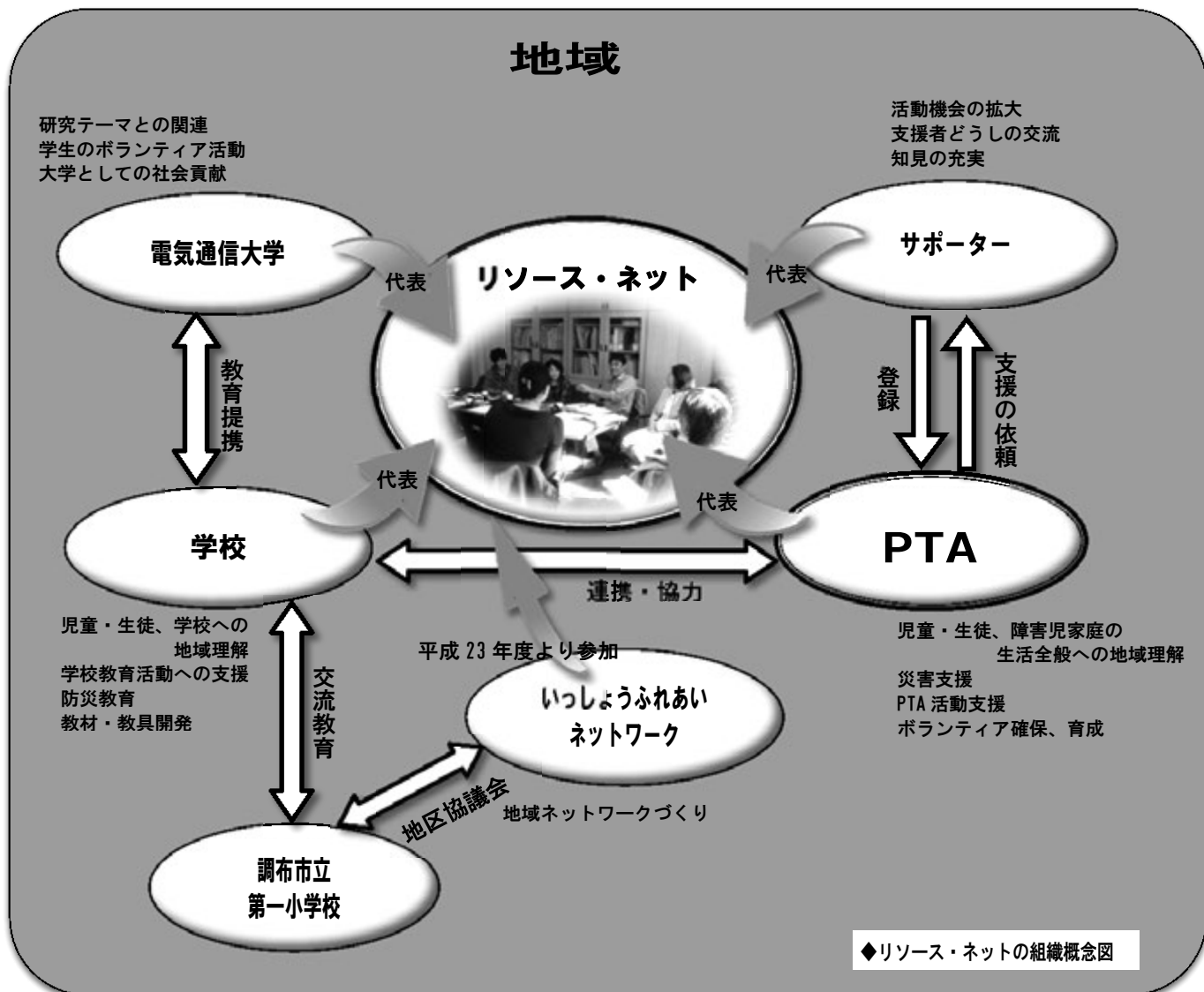
これにより、同じ地域にある 3 つの学校とその関連団体が、国立、都立、市立という学校の枠組みを超えてつながり、地域づくりに貢献していくユニークで実験的な土台ができたといえます。

東日本大震災をうけて

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災では、本校の所在する多摩地区では震度 5 弱を記録しました。本校では中学部生徒が授業中で在籍しており、保護者による一斉緊急引き取りが行われました。また多摩地区を横断する幹線道路沿いという立地条件から、本校は帰宅困難者支援ステーションとして多くの帰宅困難者を受け入れました。

当日は通信手段の混乱で一斉送信メールシステムに遅延や不具合が起き、保護者も帰宅困難となるケースもあるなど、緊急引き取りには思わぬ困難が多発しました。またその後の計画停電の影響も大きく、さらに被災地での知的障害児・者やその家族の苦労などが報道されるにつれ、災害時の地域支援の重要性があらためて浮き彫りになりました。

首都圏では大地震の危険性がますます高まっているといわれています。リソース・ネットとしても、地域の支援が必要となる重要な分野として、防災に関する活動にも力を入れて取り組むべきと認識を新たにしました。



3-2 P T A の役割

登録サポーター制度

P T A は、行事の際のボランティアの安定確保と、地域への理解啓発を目的とした年間登録ボランティア制度「サポーター制度」を平成 16 年度に発足させ、活動を通じて多数のボランティアの方々と交流し、また行事等を通じて育成を行ってきました。

登録していただいたサポーターには年度当初に年間予定を通知して参加確認を行うことにより、各種行事への支援者の一定数の確保を実現しています。また、近年は P T A 主催の活動だけでなく、学校主催の行事等にも参加対象を広げ、経験を積んだサポーターにさまざまな場面でご活躍いただいています。

いっぽうで、新規に登録していただくサポーターの発掘や、定着に向けた働きかけについては困難が伴っています。P T A 内のマンパワーやネットワークだけでは、能動的にサポーターの拡充に乗り出す余裕がないのが大きな課題です。

また、児童・生徒とのふれあいや知見の充実を求めて登録されるサポーターに対し、期待に応えきれぬ数の活動内容・機会を提供することが難しく、サポーターが満足感を得られていないという実態もありました。

「仕組みづくり委員会」からリソース・ネット設立への参画

そうした実績と課題を踏まえて、平成 20 年度の「外部の教育資源を活用した教育支援事業」に向けた仕組みづくり委員会にも、P T A 会長、サポーター制度事務局（P T A 役員が兼務）およびサポーター代表が委員として参加しました。会合では保護者や支援者の立場から、外部支援のニーズ、ボランティア普及や育成のありかたについて意見・要望を述べてきました。

リソース・ネット発足後は、その運営に P T A や登録サポーターが参加し、P T A 活動への支援はもちろん、児童・生徒とその家庭への地域理解の道を探っています。

防災に向けた試み

東日本大震災は P T A 活動にも大きな課題を残しました。P T A では、震災後の平成 23 年 7 月に「東日本大震災とわたしたちの防災行動」と題するアンケートを、当時の在校生保護者全員を対象として行い、都市の中での「災害時の不安や問題」を調査しました。アンケートは記述式で A4 判 4 ページにわたりましたが、回収率はこの種のアンケートとしては高い（約 70%）ものであり、保護者の危機感の高さがうかがえました。

結果を受けて P T A として取り組むことを考えたとき、「親の頑張り」や「家族の備え」だけでは乗り越えられない課題が多々あることに思い至りました。そこで、P T A の力だけでなく、リソース・ネットという組織を通じて専門家や地域の方たちのお知恵をお借りしながら、「ほんとうに役に立つ」取り組みをめざすことにしました。

3-3 実効性のある活動とするために

以上のように、「地域理解の形成」「災害時支援の確保」にあたって、

- 支援者数の拡大
- 支援するチャネルの拡大
- 支援を得るためのノウハウの蓄積

という目標のもと、リソース・ネットの特色を生かした活動を充実させ、地域に根付かせていくために、運営に参加する各機関、団体が目標に合致するさまざまな助成や指定校事業等を持ち寄ってコラボレーションすることにより人的、予算的、組織的な枠組みを広げ、広く多方面の協力を仰ぎながら各種の事業を集中的に行って成果を上げるという試みを行うこととしました。具体的には、

学校としての指定事業

- 平成 24 年度 都立特別支援学校における放課後等活動推進事業 実施モデル校
- 平成 24 年度 防災教育チャレンジプラン（内閣府）実践団体

P T A としての助成事業

- 平成 24 年度 全知 P 連調査研究助成金

の各指定校となりました。

このうち P T A の調査研究事業として「日常、非日常の両面から支援を受けるための試み」を、リソース・ネット委員会と協同しながら取り組むこととしました。

※1 電気通信大学との教育提携を受けた取り組みとしては、リソース・ネットのほかにも学校への支援として、教材作成支援、ICT 支援、教職課程学生のボランティア等々さまざまなものがあります。なかでも I C T 活用推進モデル事業（平成 23 年度）に関する諸事業に対しては多大なるご協力をいただいています。

4 事業計画

「日常の支援」を根付かせる活動

- 学校休業日である土曜日の余暇活動として年間複数の行事を企画。行事に参加する児童・生徒と一緒に遊んだり介助したりする体験を通して知的障害のある児童・生徒に対する理解を深め、親近感を持ってもらう。
- 行事計画にあたっては、「ともに楽しめる」「経験値を向上できる」内容であることを重視し、保護者、教員、サポーター（ベテランボランティア）が参加し、初めてでもお手本となる支援のしかたを見ながら自然に児童・生徒と交流が可能なよう配慮する。
- P T A が従来行ってきた行事のほか、「放課後等活動推進事業」「電気通信大学公開講座」を活用し、P T A、リソース・ネット以外の協力も得て負荷軽減しながら円滑に運営できるようにする。
- 広報パンフレットを制作し、行事等参加者以外にも広く周知する手段として利用する。

災害などの「非常時に備える」活動

- 大規模災害時に支援を求めるための土台となる活動を行う。
- 平成 24 年 9 月に本校にて実施する「総合防災訓練」、「防災教育チャレンジプラン」と連動する。
- 平成 23 年 7 月に P T A で実施した「東日本大震災と私たちの防災行動」アンケートに基づき、非常食、避難所、一人通学時の被災等、保護者の不安や必要とされる備えに対応する活動を行う。

ボランティア募集、公開講座受講者募集にあたっては、例年どおり P T A 登録サポーターに年間計画を告知して参加調整したほか、電気通信大学構内、学区内自治体ボランティアセンター等にポスター・チラシ等を設置し、調布市内在住、在勤の市民を中心に公募しました。

5 事業の詳細

(目的、事業概要、成果と課題)

5-1 「日常の支援」を根付かせる活動

児童・生徒の日常の活動を支える支援の輪を広げるための活動について報告します。実施に当たっては「放課後等活動推進事業」にもとづき行われる事業と連動し、主に土曜日の余暇活動を複数回実施することによりボランティアの参加機会を拡大しました。実施にあたっては、保護者、教員、ベテランボランティアが経験の浅いボランティアをサポートする形をとり、「育成」にも力を入れました。

5-1-1 じゃんけん・PON!

サポーター制度を根付かせ、登録ボランティアの活動機会と、児童・生徒やその保護者とボランティアとのふれあいの機会を提供するために行われてきた P T A 行事です。平成 23 年度から企画・運営をリソース・ネットに委託しました。

目的

P T A のサポートのもと、学生、地域住民等がアイデアを出し、出演交渉、出演、進行等を実際に行いながら児童・生徒と交流します。当日の児童・生徒との交流だけでなく、企画・運営、出演など多方面から、「知的障害児の余暇活動」の体験をし、理解を深めていただきます。

概要

日時	平成 24 年 10 月 27 日 (土)
場所	本校体育館
内容	ジャグリング (電気通信大学学生サークルによる)、ゲーム、ダンス、キャラクター着ぐるみとのじゃんけん大会 電気通信大学サイエンスミュージアム (手作り科学おもちゃ) の展示、実演
参加者	児童・生徒 38 名 (保護者・兄弟・介助者等 35 名) ボランティアスタッフ 31 名 (教員、リソースネット委員含む)

ダンス・ゲーム・体操には本校卒業生保護者を中心としたダンスグループ「レインボーズ」が企画・運営に全面協力しました。

同じ体育館内に展示・実演コーナーも設け、集団にうまく加われない児童・生徒もボランティアとともにおもちゃで遊んで楽しめるようにしました。

人気キャラクター「ワンワン」の公認コピー着ぐるみ (個人所有のものを借用) を登場させ、楽しく盛り上がる時間を作ることができました。



◆サイエンスミュージアムの展示・実演



◆キャラクターとじゃんけん大会

成果と課題

P T A 役員を経験し児童・生徒の特性や学校のルールや施設設備などにも通じている卒業生保護者が、経験の浅いボランティアや出演団体をサポートする形で進行でき、障害児の特性理解の大きな助けとなりました。卒業生保護者もまた、本校のボランティアを側面から支援する貴重な「リソース」として定着したといえます。

ボランティアの参加人数と児童・生徒の参加人数とのバランスがとりづらいことから、親子参加の活動としています。そのため、保護者と児童・生徒の関係の中に面識の少ないボランティアが割って入り交流するのが難しい面があります。スタッフの配慮だけでなく保護者側への働きかけも含めて、その部分についてはさらに検討し、参加したボランティアの体験の「質」を保障できるようにしないと、参加してもフラストレーションがたまる結果になります。本活動を継続していく上での大きな課題です。

5-1-2 電気通信大学学園祭見学

目的

電気通信大学の学園祭をボランティアとともに見学、出し物を見たり買い物をしたりすることによりボランティアと児童・生徒が交流することをめざします。

学校外でボランティアとともに行動するという初めての試みです。

概要

日時 平成 24 年 11 月 24 日（土）

場所 電気通信大学キャンパス一帯

内容 展示・実演・演奏等見学

模擬店での買い物

その他

参加者 児童・生徒 7 名（保護者・兄弟・介助者等 8 名）

ボランティアスタッフ 12 名（教員、リソースネット委員含む）

集合場所から中間地点までは全員で移動、そこから「児童・生徒 1 名+保護者+教員またはサポーター+初心者ボランティア」のチームごとに分かれ、児童・生徒の興味に応じて学内を自由に散策、見学や買い物を行いました。

集合・解散場所、また子どもの状態に応じて休憩・カームダウン可能な

場所として、電気通信大学ボランティア推進部の展示スペースを提供していただき、「戻る場所」のある状態で安心して見学に回ることが可能となりました。

成果と課題

参加者募集の結果、児童・生徒一人につき、保護者・ベテランサポーターまたは教員・初心者ボランティアで構成するチームを全員に対し組むことができました。初心者ボランティアは保護者やベテランのかかわり方を見ながら少しずつ距離を縮め、最終的に児童・生徒とふたりで何かする…というように段階的に経験を積む理想的な方法を取ることができました。

固定した場所で活動するのとは違い、広いキャンパスで自由に歩き回るという形態は、他の干渉が少なく状況の変化が多いので児童・生徒の多様な行動を目にすることができ、かかわりのチャンスも多くなります。きっかけを多く持つことでボランティアと児童・生徒のなじみが早く、ボランティアの「実感」につながりやすいようです。「役に立った」という実感を得ることはボランティアの定着につながるため、この試みは非常に有効であることがわかりました。

児童・生徒とボランティアの数の組み合わせが今回は幸いにもぴったり収まりましたが、次年度以降も継続して行う場合、人数に合わせて活動形態を適宜変えていく必要があります。ただ、それを考慮に入れても、「一緒に動き回る」というやりかたが、初心者ボランティアにとって満足感の大きい、収穫の多いものであるという認識が得られました。

5-1-3 ドッジビー講座

平成 25 年度国民体育大会（東京大会）の公開競技として調布市を会場に行われる「ドッジビー」を親子で楽しむ催しです。

指導員派遣の制度を利用し、指導をうけながら大人も子どもも同じことを楽しむという場面を利用してボランティアに児童・生徒とふれあってもらうことを目的とします。

日時 平成 25 年 1 月 26 日（土）
場所 本校体育館
内容 ドッジビー体験

参加者 児童・生徒 12 名（保護者・兄弟・介助者等 19 名）
ボランティアスタッフ 7 名（教員、リソースネット委員含む）

※報告書作成時点で未総括のため実施概要報告のみとさせていただきます。ご了承ください。

5-1-4 公開講座「ボランティア養成講座」

電気通信大学では、大学の持つ資源を社会に還元する目的で公開講座を設置しています。その講座の一つである「ボランティア養成講座」の企画・運営を、平成 22 年度からリソース・ネットが継続して行っています。

講座年 2 回行われ、本校及び児童・生徒の姿を通して、知的障害児・者を支援するための基礎知識を学生や一般市民に提供することを目的としています。

今年度 2 回目となる第 6 回の講座では、今年度のリソース・ネットの各種事業の成果を踏まえ、パネラーとして P T A、登録サポーターのそれぞれ代表がパネルディスカッションに参加します。（報告書作成現在未実施）

また、講座終了後には「情報交換会」が行われ、参加者が立食形式で歓談しながら交流を深める時間となっています。

日時	2 月 2 日（土）13:00～16:30（予定）
場所	本校および電気通信大学
テーマ	「特別支援学校の子どもたちとのふれあい ～共生社会の実現をめざして～」
内容	学校見学（土曜参観日を利用） 講演 パネルディスカッション
参加者	未集計（1 月末日現在）※定員 100 名

※報告書作成時点で未実施のため、実施予定内容のみの報告とさせていただきます。ご了承ください。



◆昨年度公開講座のようす

5-1-5 広報パンフレットの制作

目的

本校を中心に行われているボランティア活動や、リソース・ネットの活動についてはもちろん、広く「知的障害」について、あるいは「特別支援学校」についても、まだまだ地域には知られていないことも多く、「知らない」ことが、支援が広がるための大きな障壁になっています。

「知ってもらう」ためには、単に「来た人に経験してもらおう、聞いてもらう」だけではなくさらに広い範囲で伝達する手段が求められます。

その手段として、学校ボランティア広報パンフレット「知ってください わたしたちはここにいます」を制作しました。

リソース・ネットの紹介パンフレットとしての機能も兼ねられるようにしました。

仕様

A4 判 マットコート紙 フルカラー 8 ページ

配布対象

行事参加者・公開講座参加者

地域団体、地域住民

その他必要に応じて

内容

タイトル「知ってください わたしたちはここにいます 特別支援学校の子もたちとともに」

- ・ はじめに ー知る、という手助け
- ・ 知的障害ってなんだろう
- ・ 知的障害のある子どもが学ぶ場所ー特別支援学校とは
- ・ 地域の中の特別支援学校ー調布特別支援学校ってどんなところ
- ・ 「知っている私」になるためにー今すぐできるボランティア
- ・ 「知る」を支える組織があります

(詳細な内容については添付資料 1 を参照)



5-2 災害などの「非常時に備える」活動

東日本大震災の教訓をもとに、本校では「防災教育チャレンジプラン」の実践団体の指定を受け、9月に大規模な総合防災訓練を計画し、それに向けて様々な取り組みを開始しました。また、平成24年度から新たに「防災教育推進委員会」が設置され、外部より防災の専門家、消防、警察、市防災担当の方々をお招きして協議が行われました。

いっぽうPTAでは、東日本大震災後の平成23年7月に「東日本大震災と私たちの防災行動について」と題するアンケートを、震災当時在籍した全保護者を対象に行いました。

その結果をうけて、保護者の不安や危機感に 대응する取り組みは何かを考え、多方面の協力を仰ぎながら実践に取り組んできました。

また、平成24年度よりPTA内に「危機管理担当者」を設置しました。PTA役員から1名、一般会員から1名が推薦され、「防災教育推進委員会」の委員として参加したほか、PTAの各種活動における危機管理、上記のアンケートやそれから派生する取り組みについて中心的な役割を果たしてきました。

ことに「防災教育推進委員会」の場では、PTAの取り組みについてご説明し、それぞれのお立場からご意見・ご提案をいただき、より実効性の高い活動を展開していくことができました。

リソース・ネット及びPTAが関わった取り組みについて、学校主体のものも併せて報告いたします。

5-2-1 「たすけてカード」の制作

制作経緯・目的

前述したアンケートでは、大災害発生時、一人通学の児童・生徒の保護者を中心に「もし一人でいるときに災害が起こってしまったら…」という不安が寄せられました。

子どもが一人になったとき、「その場に」子どもの情報を記したものがなければ、助けを求めることができず、もし誰かが助けようとしてもその方法がわかりません。子ども自身は何らかの情報を携帯している必要があります。そのためのツールを開発してはどうか、という提案が、平成23年度からPTAで継続して話し合われてきました。

本校では、主にスクールバス乗車時の緊急事態を想定し、連絡先を記入したカードを通学カバンに入れるという試みが平成23年度からスタートしています。その際、PTAからの提案として、チャック式クリアケースにカードを入れ、蛇腹式のストラップでカバンに固定する方式を提案し、全校に展開されました。

これを利用し、小ぶりのカードファイルに必要最低限の「サポート情報」を入れて持たせることにより、万一の場合の保護に役立ててもらおうことを考えました。

また、持っているか否かの判断ができず見過ごされてしまう可能性があることが地域住民のリソース・ネット委員から指摘され、持っている目印のストラップ（たすけてストラップ）をかばんに着けることが提案されました。

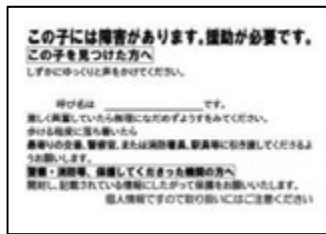
以上のような経緯と目的で、「たすけてカード」「たすけてストラップ」の考案・作成を実施し、校内への配布と普及とともに、災害時の救難機関となる警察・消防や公共交通機関、自治体への啓発を目的としたパンフレットの作成を行いました。

仕様

- L判（写真用）カード 19種1セット
- クリアファイル（写真用ミニアルバム）にファイリング
- 透明糊付ビニール封筒に封入、専用シールで封印
- 所持することを示す「たすけてストラップ」とともに所持する



カード表面



カード最終面



ビニール封筒に封入

（カード全種の内容については添付資料 2 を参照）

（1セットあたり制作費 約 300 円）

内容

- 連絡先
- 基本情報（配慮・支援の必要な項目の一覧表）
- 服薬、発作、アレルギー等の医療情報
- ことば、身辺自立、気持ちの安定など介助関係情報
- だいじょうぶカード（保護後に「安心できる状況」であることを伝える絵カード）

※表紙イラストは安田生命こころの財団作成「コミュニケーション支援ボード」内のイラストを、同財団許諾のもと使用させていただきました。

また、「だいじょうぶカード」のイラストについては、イラストレーターほりこしくみこ様にご協力いただきました。

たすけてストラップ

約 5 cm 四方のシンボルマーク型ストラップです。反射材を使用して安全用のグッズとしても活用できるようになっています。入手に特別な方法を用いなくてもよいよう、市販されている材料を組み合わせて自作できるようにしました。

- 素材
 - クリアホルダー
 - 反射材テープ（50 mm幅）
 - シンボルマークを印刷した透明シール
 - リング
- （1セットあたり制作費約 60 円）

■ 作成方法

不要になったクリアホルダーを 5 cm ほど切り取り、両面に反射材テープを貼り、その上からシンボルマークのシールを貼って形通りに切り抜き、穴をあけてリングを通す。

手持ちのストラップやキーホルダー等を利用して通学かばんなどに装着する



◆ストラップ（実寸大）

■ シンボルマーク—三つ葉のクローバー型。

クローバーの葉はハート形をしており、「親・学校・地域の 3 つの心が手をつないで子どもを守る」という意味を表しています。市販されているインクジェットプリンター用透明シール用紙に印刷して使うことができます。

使われかたのイメージ

児童・生徒が大規模災害に遭遇した際、一人通学の途中や、同行者が死亡・負傷などで介助できず「ひとりぼっち」の状態になったことを想定しています。

はじめに接触した方が身元などの情報を得るために児童・生徒が持っているかばんを調べ、カードを見つけたら、まず開封しなくても「呼び名」と「最寄りの救難機関に引き渡しお願い」がご理解いただけるようになっています。

救難機関に引き渡し後、そこで開封していただき、中の記載事項に沿って連絡先に連絡していただきます。

連絡がつくまでの間、また連絡がつき支援者が到着するまでの間、中の情報にしたがっていただければ適切な支援ができ、児童・生徒本人だけでなく、保護した方の負担軽減につながると考えています。制作にあたっては、救難機関で保護していただく時間をおよそ 24 時間と想定しました。

情報の悪用を抑止するために署名を要求していますが、混乱の中での署名は難しいことも想定しています。

制作にあたってのポイント

■ 個人情報はどう保護するか

犯罪や悪戯に利用されたり悪用されたりする不安はこの種のものにはつきものです。その対策を施さなければ普及につながりません。ことに女兒の保護者にとっては性犯罪被害への懸念も大きく、重要な問題です。

封筒に入れること、封印して開封者署名を求めること、等のアイデアがリソース・ネット委員会から出されました。ただの封筒では中身の重要性が伝わりにくいので、透明ビニール封筒（糊付OPP袋）を採用しました。

■ 所持するための保護者の負担を減らす

日ごとに災害の記憶が薄れていく中で、いつ起こるともわからない「もしも」に備えるモチベーションも徐々に低下していきます。そんななかで普及し定着させていくために「入手・作成の簡便さ」も重要です。

カード式

項目に○を付ける形式を基本にしたカードを個人に合わせて取捨選択でき、また差し替えも容易なようにしました。

ダウンロード可能

インターネットの本校HP上に公開し、だれでも自由にダウンロードできるようにする予定です。ストラップ用のシンボルマークや封印シールも同様です。

市販の写真用紙（L判）に家庭用プリンターで印刷できます。

市販品を組み合わせて作成可能

封筒やファイルは 100 円均一ショップで入手可能なものにし、特別な入手経路を用いなくても作成が可能なようにしました。

ストラップについても、完成品を外注するなどして制作するのではなく、PTA単位で素材を用意することができれば個人で作成可能な形態にしました。

啓発パンフレットの制作

実際にカードを見る立場となる警察、消防、公共交通機関、自治体等にカードとストラップの紹介と活用をお願いを記載したパンフレットを製作しました。今後、調布市を中心として学区内の関係諸機関に段階的に配布していく予定です。



■ 仕様

A4 マットコート紙 フルカラー 4 ページ

■ 配布対象

学区内の警察署、消防署、公共交通機関、自治体防災部門・福祉部門等

校内講習会の実施

カードの作成、ストラップの作成を、作り方や意味を説明しながらみんなで作り、あわせて大災害に対する P T A の取り組みを報告する校内講習会を実施します。(平成 25 年 2 月 25 日実施予定)。

5-2-2 防災教育研修会

年度当初の 5 月、秋に行われる総合防災訓練に備え、防災教育研修会が学校主催で実施されました。

消防署、警察署、調布市、地域住民、地域の学校などの関係諸機関と連携し、非常災害時の危機管理対策の課題を共有し、一緒に考えていくことを目的とし、危機管理意識の向上をめざしました。また、後日実施の総合防災訓練時の避難所設営に向けた助言を多数いただくことができました。

震災体験者の生の声を聞くことで、避難所における障害者への支援や対応の現実について知り、関係者全員が、訓練の前提となる問題点や意識を共有する機会となりました。P T A も参加し、自分たちが直面する可能性のある困難について認識を新たにしました。

日時 平成 24 年 5 月 30 日 (水)
 場所 本校体育館
 講師 福島県点字図書館館長 中村 雅彦 氏

テーマ 「特別支援学校における危機管理対策」

東日本大震災にて障害者がどのような状況におかれていたか、写真を含めたスライドにて説明があった。

- 1 広範囲の通学、通勤への対応
- 2 震度 5 強以上への対応
- 3 高齢者、障害者の在宅率が増加
- 4 放射能被害への対応
- 5 学校以外の場所での被災からの避難
- 6 軽度・重度障害者への対応
- 7 特別支援学校が果たした役割 緊急時に学校は何をどこまでやれたか
- 8 学校はどう動いたらよいか（検証）
- 9 これからの震災に備えて
- 10 東日本大震災を振り返っての課題
- 11 地域で情報を共有するために ～緊急時の個人情報の取扱い～

研修会後実施したアンケート結果から、

- 1、障害のある方がどんな点に困っているのか実感できた。
- 2、地域・近所が理解し合い、助け合うつながりを普段から構築していくことの大切さがわかった。
- 3、災害時は自分でなんとかできることを準備しておく必要性を感じた。などがあげられた。

また、課題としては、

- 1、地域において特別支援学校が果たすべき役割を明確化していくこと。
- 2、災害時に発生した時間によって、必要な支援が変わってくることにより、困っていることやどう知らせていくかを考えていく必要性がある。
- 3、障害児を連れて避難することの困難さ。があげられました。

5-2-3 非常食体験★

目的

P T A から全校保護者に対する「夏休みの宿題」として「親子で非常食体験」を提案し、実施しました。

非常食はふだん食べなれていないものであることも多く、摂食関係に困難を抱えていたり慣れないものに弱い特性を持つ児童・生徒にとっては災害時に大きなストレスとなったり、生命を脅かすことにもなりかねない重要な問題です。

夏休み期間に親子で食べる体験をしてもらい、体験談をアンケートとして回収しました。

実施期間 平成 24 年 7 月 20 日～8 月 31 日

対象 全在校生保護者

アンケート回収数 73 通

案内文書では非常食の例を挙げ、各家庭で適宜選んで実施してもらいました。

例

- 重大非常時の高カロリー食（ピーナツバター、マヨネーズ、スプレッド等）
- インフラ不備でも食べられるもの（各種缶詰）
- 状況が多少改善してからの非常食（レトルト、インスタント、お菓子等）

回収したアンケートから（抜粋）

実際に食べてみたもの

缶詰、非常用白米、レトルト（カレー、雑炊等）、カップめん、乾パン、栄養補強ビスケット類、ピーナツバター、フリーズドライ食品、水でもどして食べる餅、エネルギー飲料など

食べるのが困難だったものとその理由や注意点の例

缶詰

- ・ 中身がわからないと警戒して食べようとしない（ラベル等の工夫が必要）
- ・ 缶切りを一緒に保管する必要がある

レトルト

- ・ 温める必要があるものはすぐに食べることができない状況になる

乾パン・ビスケット

- ・ 食べにくいので水分が必要・かたくて食べられない

ピーナツバター等

- ・ そのままで食べるのは困難

感想

- ・ 普段から非常食になりうるものを食卓に出して慣れさせておく必要がある
- ・ 非常食袋を一つでなく複数用意し、いろいろな場面を考えて用意しておきたい
- ・ 非常食を考えるよい機会になった
- ・ 普段のものでも十分対応できる可能性がある

課題

- ・ 緊急事態の状況で(食材の問題でなく)子どもが食事ができるかどうか不安
- ・ 量的な問題（中学生以上になると食欲が旺盛、家族全員分だと量が多い）

反省・課題など

各家庭での自主的な実践のお願いであったにもかかわらず予想以上に多くの体験談が寄せられ、保護者の危機意識が十分高い状態であることが確認できました。

アンケートでは、缶切りの存在等、実際に「意外な盲点」になりがちな部分に自ら気づいた保護者が多く、報告書にまとめてその体験を共有することで、現実的な災害対策につながっていきます。家族参加型の防災訓練の一環として有効な試みだと感じました。

5-2-4 避難所設営・避難所体験

学校主催「総合防災訓練」の一環として、ボランティアによる避難所ブース設営試験、設営したブースでの児童・生徒の「避難所の雰囲気」体験を行いました。

目的

本校は調布市の防災計画の中で二次避難所（福祉避難所）に指定されており、災害時は避難所設営の必要があります。また児童・生徒は発災時の避難については学校において十分に訓練を行っているものの、その後の「避難生活」についてまったく知識・経験がありません。

こうしたことから、実際に「避難所設営」を試行して手順や問題点を把握しておくと同時に、「避難所のような雰囲気」を児童・生徒と保護者に体験してもらう試みを、総合防災訓練のなかに取り入れることとしました。

告知と参加者募集への協力（ボランティア公開講座）

総合防災訓練に参加していただくボランティアの募集を兼ねて実施された電気通信大学公開講座「ボランティア養成講座 第5回」の中で、PTAは先に実施した「東日本大震災とわたしたちの防災行動」アンケートの結果をもとに、障害児を抱える家庭の直面する不安や困難について発表、具体的な支援のイメージを想起していただく材料としました。

日時 平成 24 年 7 月 7 日（土）
 会場 電気通信大学
 テーマ 震災時に障害のある子どもたちを守るには
 ～学校と地域が連携した訓練に向けて～

予備訓練

「総合防災訓練」のための予備訓練として、体育館に避難ブースを設置する実験・訓練を、リソース・ネット運営メンバーと一般公募の防災ボランティアが行いました。

防災担当教員の立ち会いと指導のもと、設計図と組立マニュアルをもとに、市販品のプラダン（プラスチックボード）と面ファスナー、粘着テープなどを用いて簡単なブースを設置しました。

日時 平成 24 年 8 月 29 日（水）
 場所 本校体育館ほか
 内容 設営用品の倉庫からの運搬
 展開・組立

総合防災訓練

予備訓練で設営体験を行ったメンバーを中心に、リソース・ネット運営メンバー及び防災ボランティアのみで、設計図をもとに再度設営を行いました。完成後は、緊急引き取り訓練で来校した保護者が、児童・生徒の引き渡し終了後、設営した避難ブースに入り、実際の避難所のような雰囲気を親子で体験しました。

日時 平成 24 年 9 月 26 日（水）
 場所 本校体育館ほか
 内容 設営用品の倉庫からの運搬

展開・組立 その他必要物品の設置、配置 児童・生徒と保護者の受け入れ、体験

反省・課題など

アンケート結果から 地域ボランティアの方より「災害時に、自らどのように動いたら役にたつかわかった」「教員からの指示がなくても次は自発的に行動できると思う。」という肯定的な意見と、「災害時、本日集まったメンバーが必ずしも集まれるとは限らない。誰でもブースが設営できるようなマニュアルが必要ではないか」といった課題もよせられました。

また、保護者からは「実際に避難所で生活するイメージがもてた。」「災害はどこか他人事のように思えていたが、体験することで身近にせまっていると感じた。」という意見と「このような避難ブースでは生活することは困難である。」「児童・生徒の実態を考慮することは難しいとは思いますが、障害に配慮した設営を工夫したい。」といった意見も上がりました。

購入した設置訓練用物品では組立手順、強度などに問題がありました。ブースのサイズに関しても、最低限の視覚的プライバシーが保てる程度のブースであり、災害弱者のための避難スペースとしては貧弱であり現実的ではないのでは？という意見もあり、設計にはなお多くの工夫が必要であると思われまます。

避難所体験に関しては、事前に保護者向けに告知した文書の中でその目的や意義等が十分に説明されていなかったため、目的意識をもって体験に訪れた親子が少なかったようです。そのため「避難所体験」としては内容の薄いものになってしまった感があります。また事後のアンケートのタイミングが遅れ、保護者からの感想の聞き取りが不十分になりました。周知や意見聴取の方法を事前に十分確認・準備する必要を痛感しました。次年度以降はこのようなことがないようにしたいと思います。

多数の問題や反省点があり、今後に大きな課題を残す試みとなりましたが、福祉避難所としてのありかたや、支援者のとるべき行動、訓練のありかたなどについて、実際に行ってみることで課題や認識不足などが目に見える形で具体化され、全員が共有できた面もあります。

実際に被災したら…ということを実際レベルで考えるための非常に重要な材料となり、その面では大きな収穫があったと考えます。



◆ボランティアによるブース設営



◆児童・生徒と保護者の避難所体験

6 総括

(全体の成果と課題)

6-1 成果

複数の助成事業・モデル事業等のコラボレーションによって、PTA以外の関係者・専門家等の協力、助言を受け、大きな動きを展開できたこと それが将来の活動の可能性を広げたこと

単位PTAの組織では、単年度会計であることや役員任期（原則1年）の関係から、「例年のこと」を超えた大きな事業を計画・遂行することが難しいものです。また、PTAだけで行う事業では、必ずしも十分な知見や労力を得られるとは限らず、外部専門家の助言を得ることも非常に難しい面があります。

今回の事業では、リソース・ネットという支援団体をベースに活動し、また複数の助成事業やモデル事業と連動させることにより、多種多様な立場の方の協力を折にふれ仰ぐことができ、全体として大きな事業を遂行することができただけでなく、内容的にも充実したものになりました。また、PTAとして負荷の大きかった部分に外部から協力を得られる土台ができたと同時に、あらたな分野に知識・経験を広げることができ、今後の活動の可能性を大きく広げることができました。

事業を通じ、関係者に「地域の構成者」という意識が強く生まれたこと

PTA、学校、外部等々の枠組みに囚われない発想、行動が可能になったこと

年間を通じ多数の事業の実施のためにいくども顔を合わせ行動を共にする過程で、別の団体の所属であったり年齢や属性もさまざまであった人たちに連帯意識が芽生え、次第に立場に拘らない発想・発言・行動が生まれています。

「ご意見を聞く」「お客様としてお迎えする」というお付き合いでなく、「ともに考え、体を動かす」「ともにイベント等を運営する」という活動であったことが、「よく知っている地域の仲間」として立場の垣根を超えるのに非常に有効であったと思われます。

このような活動を通じて、個人が個人としてさまざまな場面に応じて自分の得意なことを役割として自発的に請負い、分担するという流れができれば、その輪をつなげることでひとつの大きな「地域の絆」のベースになっていくのでは、と期待しています。

イベント運営のノウハウが蓄積され、協力者が多数生まれたことによりPTAの負荷軽減

行事やボランティアの募集・育成といった、PTAとしても負荷が高くやり方の難しい事業に対し、広いネットワークから多彩な協力が得られ、視野が広がるとともに負荷の軽減につながりました。

また、多種のイベントの企画・運営を集中して行ったことで、ノウハウが蓄積され、今後新しい行事や活動を企画していく際に大きな力となると思われます。

支援者、理解者の拡大、問題意識の共有

年間を通じ、また各種事業を通して多数の参加者がありました。従来からご協力いただいている登録サポーターだけでなく、新規に参加した方も多く、貴重な支援者として今後も関係を築いていきたいと思えます。

また、防災訓練では、社会福祉協議会や民間の福祉団体などからも参加があり、地

域内で災害弱者を支援する立場から課題を共有することができました。

さらに、「防災教育推進委員会」には、地域の消防、警察の担当者や防災の専門家の方々にも加わっていただいています。そのおかげで本事業を進めるにあたって幾度となくご相談の機会を得ることができ、それぞれのご専門の見地からさまざまなご助言をいただくことにより、内容を充実させることができました。

6-2 課題

継続性の問題 関係を持続していくための方策

前述したとおり、本事業を通して、「立場を超えた個人としての関係」が、地域ネットワークの基礎づくりとして非常に重要であるという認識に至りました。そして、その関係を築くためにはやはりそれなりの時間と機会が必要です。また、自発的な意思での参加であることも重要です。リソース・ネットは、こうした地域ネットワークづくりの「場」を提供する役割を担っていくことが期待されます。

本校 P T A は、役員任期が原則 1 年です。役員の仕事の一環としてリソース・ネットの運営をはじめとした地域ネットワークづくりに参加し、関係を築くには、任期の範囲内では時間が短すぎ、活動に十分にコミットできるようになる前に交代を余儀なくされます。

P T A がリソース・ネットに参加するにあたっては、参加者は本校の保護者の希望や考えを代表して伝えていくことが求められるので、基本的には今後もそのような役割を経験している役員または役員経験者が参加することが望ましいと思われます。しかし多種多様な保護者の要望を確実に反映させていくためには、今後広く P T A 一般会員にも参加を働きかけ、継続して関わっていく人材を発掘していくことも必要であると考えています。

また、リソース・ネットは平日の日中に会議を行い、行事等は学校の休業日に実施されます。それゆえ一般教員の参加が難しいという問題もあります。どのようにかかわっていただくのが最善かは今後の検討課題です。

周知の問題 校内・校外へより広く意義を伝える「知る」へのアプローチ

本事業では、学校が所在する地域においての地域ネットワークづくりに取り組んできました。児童・生徒が登下校し、校外活動などでもお世話になるなど多くの時間を過ごすこの地域で理解が進み、多種の支援が得られる土台ができることは児童・生徒の生活にとって大きな助けとなります。

いっぽう、本校の学区は 3 市にまたがっていて、学校の所在地周辺の「地域」が児童・生徒の居住する「地域」と必ずしも同一というわけではありません。児童・生徒にはそれぞれの居住地周辺での「地域理解」も課題となります。我が子の幼少時から直面しているその課題と比較すると、学校周辺での地域ネットワークづくりは、保護者にとって我が子・我が身の直接の問題としてとらえにくい傾向があります。

今後は「学校」エリアでの地域理解が個々の児童・生徒あるいはその家庭にとってどういったメリットにつながっていくのかを明確に伝えて、活動の意義への理解をさらに進めていくことが求められます。

また、今回の事業では、活動の存在を広く地域の人たちに伝え参加を促す「広報活動」についてはやや手薄になった面があります。学校や関係機関へのポスター掲示、印刷物配布・配架等だけでなく、広報活動には新しい発想や手段の開拓が必要です。各種

行事だけでなく、たすけてカードの普及など新しい分野での広報・啓発の取り組みも必要になってきました。

校内についても、児童・生徒や保護者が各種行事に漫然と参加するだけでは、そこにどんな人たちがどんな思いで関わっているのかが伝わらず、活動の意味が理解されない面があります。行事ごとの目的や経緯などをしっかりと伝え、その活動が自分たちにもたらすものの中味について理解したうえで、それをともに創る一員として参加できるような働きかけを目指す試みが必要です。

以上のように、「地域ネットワーク」の構築にあたっては、さまざまな意味での「知る」を増やすことが関係づくりのカギになるといえます。本事業を通じて改めてその重要性への認識を新たにするとともに、その手段の模索本事業を契機に始まったということもいえるのではないかと考えています。

人的・物的資源の問題

今回は、指定事業や助成のコラボレーションにより多数の事業を行うことができました。これらのなかには継続して実施することにより効果が上がるものが多く含まれています。継続実施のためにはやはり一定の資金や人的協力が必要になる場面があり、それらをどう調達していくか、今回ご協力いただいた方々にもご相談しながら考えていく必要があります。

7 おわりに

本事業は、本校 P T A が単独で実施したのではなく、学校、周辺の教育機関、地域住民等が大きく連携・連帯したことによって実現可能になったものです。

国・自治体の施策や社会の考え方が「共生社会の実現」という大きな課題に対し問題意識を強く持ち始めたことと、東日本大震災というできごとがきっかけとなって、地域の絆や弱者支援に対する関心が高まっています。それが、複数の機関・団体・人が枠組みを取り払ってともに働き意見を交わしあうことが重要であるという気づきに至り、また、リソース・ネットという「場所」があることで、気づきを現実の活動として形にすることが可能になりました。

単位 P T A ではもろもろの制約から為し得ないこともありましたが、多数の方の協力を得て実現に向かうことができたのは、ひとえにこのような気運の高まりと、土台となる組織の存在によるものです。

末筆ながら、本事業をともに運営してくださった、国立大学法人電気通信大学およびその関係者の皆様、調布市立第一小学校および地区協議会「いっしょうふれあいネットワーク」の皆様、東京都立調布特別支援学校の教職員の皆様、サポーターの皆様にご心より感謝申し上げます。

添付資料 1 啓発パンフレット「知ってください わたしたちはここにいます」

調布特別支援学校/リソース・ネット
ボランティアのご案内

知ってください

わたしたちは ここにいます

調布特別支援学校の子どもたちとともに

はじめに

一知る、という手助け

目の悪い人が聴講をかけるように、歩くのが困難な人が杖や車いすを使うように
知的障害がある人も、手助けがあれば、地域のなかで生きていけます

それはどんな「手助け」？

見た目にはわからない障害だから、形や道具ではない手助けが必要です。
自分で「困っている」が伝えられない、伝えにくい人たち
周りの思いがけが理解できない、理解しにくい人たち
その姿をまずは「知っていて」いただくこと、それが最初の、最大の「手助け」に
なります

特別支援学校の子どもたちを通して、どうぞ、その姿を「知って」ください。
そのための場所を、用意しています。

知的障害ってなんだろう

目に見えない「知的障害」という障害、それはどんなものなのでしょう。

知能とは、人間が環境に適応していく能力をあらゆる、記憶・知覚・運動する能力、理解・思考・判断などの能力の全体(全体的な認知能力)のこと。(国立のぞみの園ホームページより)
その能力の獲得が遅れていたり、獲得が難しかったり、あるいは極端な偏りがあったりする
ことを「知的障害」と呼びます。

いわゆる「学校の勉強が難しい」ということだけではありません。
感覚・知覚に問題があると、たとえば周りの音が「目覚めた雑音の音声を聞いたとき」の
ように聞こえて相手の言うことをうまく聞けなかったり、物が手前で見え「注目」がしにくく、
人と目を合わせることに難しかったり、触られることを嫌がったりします。
理解、思考、判断などに問題があると、言葉のコミュニケーションがうまくいかない、危
険の判断ができない、場に合わせて行動や態度がとれない、などの偏りがあります。
また、運動能力の面で、姿勢を保つ力に関する感覚や平衡感覚が弱いと、じっとして
いらなかったり、歩き方走り方がおかしくなったりもします。

このような様々な問題をかかえていると、変化に富んだ社会生活にうまく
適応できず、気持ちの不安定さや恐怖感につながります。その結果、パニック
を起こしたり発声を発したり、特定のものにこだわることで安定を得よう
としたりすることが多くなります。

言い換えれば、知的障害があるということは、社会生活のなかで、
うまく理解できない
うまく伝えられない

うまく判断できない
うまく行動できない
という、「うまくやれない」ことをたくさん抱えているということなのです。
また、知的能力のなかでもとくに対人関係など「社会的」に問題を持つ自閉症、特定の分
野の学習が困難な学習障害、多動や不注意などの「発達障害」の子もいます。
(注)

「うまくやれない」ことをたくさん持っている子どもたちは、社会で自立するために、ふ
つづの人たちが何気なくこなしているさまざまな生活能力を、長い時間をかけて少しずつ
習得していく必要があります。
その習得の場所が、特別支援学校です。

知的障害のある子どもたちが学ぶ場所 一特別支援学校とは

特別支援学校は、学習や生活の上で難にぶつかった児童が必要な子どもたちが学ぶ学校です。
将来、社会の中で自立して生きていくために必要な知識・技能を学んでいます。
少人数のクラスで、一時的な「学校の勉強」のほかに、生活のさまざまな場面に必要な技
術について、ひとりひとり能力に応じて丁寧に指導しています。

言語・算数(数学)
児童・生徒の特性や能力に合わ
せて、小グループでの学習、個
別の課題の学習に取り組んで
います

音楽・美術・体育
芸術は心の育ちの土台になり、また余
暇活動の可能性を広げます。
体育は体の使い方や体力を身に着
けます。

日常生活の指導
着替え、排便、係活動など、生活や学
習の基本となる力を育てます。生活に
必要な課題を解決するための様々な
活動に取り組んでいます。

社会性の学習
自閉症の障害特性を踏ま
え、対人関係や社会生活に
必要な役割を習います。

作業学習(中学部)
紙漉き、糊漉き、手芸等の作
業を通して、将来の自立生活
に役立つスキルを学びます。

地域のなかの特別支援学校

一調布特別支援学校ってどんなところ？

調布特別支援学校は、知的障害のある子ども
たちが通う学校です。調布駅から徒歩8分、
甲州街道に面した市街地にあります。
ここで、調布市、三鷹市、狛江市の3市から
小学部、中学部あわせて約150名の児童・生
徒が毎日通学し、学んでいます。

本校は、小学部・中学部を設置する知的障害特別支援学校です。京王線調布駅から徒歩約8分
の交通便利な環境にありながら、北に武蔵野の緑を擁する大木の森、南にゆるやかに流れる
多摩川など、豊かな自然に囲まれています。
初めて学校教育への「就学」を迎える小学部1年生から、義務教育終了の中学部3年生まで
の9年間は、「からだ」も「こころ」も大きな変化と成長を遂げる、大変ダイナミックな時期です。
この重要な時期に、子どもたちの「夢」を育て、夢の実現を目指す「学校づくり」を大切にし、
学校運営の基本として取り組んでいきたいと考えています。
「夢」は、はじめは漠然とした形にならないのも、あいついで
分らないものかもしれない。しかし人は誰しも、心の中に
「こんなことがしたい」「あんなふうになりたい」といった希望
やわがががあると思います。本校に在籍する児童・生徒一人一人の
「夢」のつぼみを見つけ、磨らませ、夢の実現を目標として、
全力で支援を行います。
「学校は子どもたちのためのもの、子どもが楽しく学べる学校、ま
た、家庭・地域から信頼される
学校となるよう努めてまいります。

目指す学校

- 1 児童・生徒が楽しく、元気に安全に学習できる学校
- 2 児童・生徒一人一人のニーズに応じた適切な指導と支援を行う学校
- 3 教職員一人一人が学ぶ姿勢を持ち続け、互いに高めあい、誇りを持つ学校
- 4 地域の特別支援教育センターとしての役割を果たす学校
- 5 教職員の公務員としての意識を高め、学校運営を改善し続ける学校

今後とも、本校の教育に、深かいて理解とご支援をお願いいたします。

設立調布特別支援学校長 野村 美代子

「知っている私」になるために…

一今すぐできるボランティア

知ってみたい、のぞいてみたい、ふれあってみたい、役に立ちたい、でもどこまでできるの？自分にもできるの？何をすればいいの？そんな思いを抱いてくださったかたのために、調布特別支援学校とその子どもたちを通して、知的障害児の世界を知る機会を用意しています。教員や保護者、他の支援者やベテランのボランティアとともに活動します。できる範囲のことから少しずつ、見て、聞いて、触れて、あなたの「知っている」を増やしてください。

ふれあいボランティア

放課後活動・PTA行事・学校活動などを通して、直接子どもたちと遊んだり、介助したり、ともに行動したりしてふれあいながら、子どもたちの生を知ってください。
行事・活動の例：じゃんけんPON、サマークラブ、調布まつり、その他イベント
見守りボランティア、学校活動への支援



●夏休みのお楽しみイベント「サマーPON」



●夏休みのお楽しみイベント「サマーPON」

防災ボランティア

特別支援学校は、大規模災害時には帰宅困難者ステーション、福祉避難所という役割を担うことが求められています。もし児童・生徒が在校時に発生すれば、災害弱者である子どもたちを守りながら避難所としての役割を担うこととなります。多くの方の手助けが必要です。防災訓練等へご参加いただき、ともにいざというときの備えと支えあう関係づくりをめざします。



公開講座

知的障害教育の専門家として、障害児家庭の当事者として、支援者として、それぞれの立場から、市民のみなさんがボランティアとして活動していただくための基礎知識の理解・啓発をめざす「ボランティア養成講座」を年 2 回開催しています。



公開講座
「ボランティア養成講座」

継続してかかわっていただくために（サポーター制度）

年齢を通し継続的にボランティア活動を行っていただけるように、ボランティア登録制度（サポーター制度）を設けています。調布特別支援学校の学校行事や PTA 行事の中で、児童や生徒が安全に楽しく活動できるように介助をしたり、行事や学校活動の実施のお手伝いをしていただきます。継続的にご参加いただくことで、知的障害のある子どもたちにももちろん、それを支える家族や学校の様子にも理解を深めていただくことができ、ボランティア同士との交流や学びあいの機会を得ることもできます。



サポーターは「登録制」です。ご登録願います。年度始めに年度計画をお知らせしてご参加の予定を確認させて頂くほか、ご参加願いたい催しがある際には随時ご連絡を申し上げます。ご参加のつく行事にご参加いただき、お力をお貸し下さい。年度途中でのご登録も随時受け付けております。思い立ったときいつでもお問い合わせください。

ボランティアのお問い合わせ・受付は

ここにご紹介した活動の詳細や、ボランティア参加についてのお問い合わせは、下記までお問い合わせいたします。



〒182-0021 東京都調布市調布っ丘 1-1-2
東京都立調布特別支援学校 リソース・ネット事務局
ℓ042-487-7221 Fax 042-481-9401
E-mail: ml-n@section.metro.tkyo.jp
URL: http://www.human.inf.ucc.ac.jp/resource/

「知る」を支える組織があります

調布特別支援学校には、学校、PTAと協力しながら、学校と地域の架け橋をめざし、子どもたちの「手助け」を考え実行する活動をする組織があります。「リソース・ネット」です。

リソース・ネットとは？



「リソース・ネット」とは、東京都立調布特別支援学校の児童・生徒が安全で豊かな学校生活を送れるように応援する組織で、近隣住民、電気通信大学の学生、教員、そして学校の教諭や保護者がメンバーとなっています。児童・生徒、教員、保護者たちが求めているもの（ニーズ）を探り、地域や近隣学校が持っているスキルやノウハウなどの資源（リソース）との連携調整を図り、イベントの企画や支援活動の立案を行っています。

設立の経緯

- 2004 年 調布特別支援学校 PTA 内にサポーター事務局を設け、ボランティアによる児童・生徒に対する支援活動がスタート。
- 2008 年 東京都教育委員会のモデル事業の認定を受け、「外部の専門家を活用した教育支援事業」に取組んだ活動づくり委員会を発足。
- 2009 年 10 月 調布特別支援学校と電気通信大学との間で教育連携協定を締結。活動づくり委員会の検討を経て、リソース・ネット設立。

運営スタッフ

運営は、地域住民、サポーター、保護者、電気通信大学教職員・学生、調布特別支援学校教諭からなる「リソース・ネット委員会」が行っています。年齢も立場もさまざまなメンバーが集い、議論を重ねています。



サポーター

ボランティアとして、学校行事や PTA 行事などに参加し、活動のサポートや手助けを行います。



教員

特別支援学校は、大規模災害時には帰宅困難者ステーション、福祉避難所としての役割を担うこととなります。多くの方の手助けが必要です。防災訓練等へご参加いただき、ともにいざというときの備えと支えあう関係づくりをめざします。



東京都立調布特別支援学校

リソース・ネット

http://www.human.inf.ucc.ac.jp/resource/

学校と地域社会の架け橋をめざして

私たちは、調布特別支援学校の児童・生徒がより安全で豊かな学校生活を送ることができるよう支援するとともに、共生社会の実現に向けて、教育ニーズと地域社会のリソースの発見および関係構築との連携調整を図る取り組みを展開します。



〒182-0021 東京都調布市調布っ丘 1-1-2
東京都立調布特別支援学校 リソース・ネット事務局
ℓ042-487-7221 Fax 042-481-9401
E-mail: ml-n@section.metro.tkyo.jp
URL: http://www.human.inf.ucc.ac.jp/resource/

添付資料 2 たすけてカードの内容 (初版)


<p>ぼくを・わたしを</p> <h1 style="text-align: center;">たすけてください</h1> <p>ぼくは・わたしは、いまでも困っています。 このカードを見て助けの手を貸してください。</p> <p style="font-size: small;">東京都立旗本町特別支援学校 P18 5-F013-1-F ver.1.0</p>	<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>警察・消防等、保護して下さった機関の方へ</p> <p>記載されている連絡先に連絡をお願いいたします。 連絡がつくまで、あるいは迎えが到着するまでは、カードの内容をもとに保護して下さるようお願いいたします。 カードの内容は個人情報です。取り扱いにご配慮をお願いいたします。 可能であれば開封された方のご署名をお願いいたします。</p> <p style="text-align: center;">開封者 _____</p>	<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>ぼくの・わたしのなまえは _____ です。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td>呼び名</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>生年月日</td> <td>平成 年 月 日</td> <td>血液型</td> </tr> <tr> <td>所属</td> <td>都立旗本町特別支援学校</td> <td>学 部 年 組</td> </tr> <tr> <td>障害手帳</td> <td>愛の手帳 度</td> <td></td> </tr> </table>	呼び名			生年月日	平成 年 月 日	血液型	所属	都立旗本町特別支援学校	学 部 年 組	障害手帳	愛の手帳 度	
呼び名														
生年月日	平成 年 月 日	血液型												
所属	都立旗本町特別支援学校	学 部 年 組												
障害手帳	愛の手帳 度													

<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>連絡先 (この子のことを理解している人)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>名前・団体名等</th> <th>電話番号</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>家族</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>学校</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>支援機関</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>主治医 (病院名・医師名)</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		名前・団体名等	電話番号	家族			学校			支援機関			主治医 (病院名・医師名)			<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>基本事項 診断名 _____</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td>パニック</td> <td>あり・なし (あり⇒対応は%)</td> </tr> <tr> <td>発達障害</td> <td>あり・なし (あり⇒%)</td> </tr> <tr> <td>聴覚</td> <td>あり・なし (あり⇒%)</td> </tr> <tr> <td>自閉</td> <td>あり・なし (あり⇒%)</td> </tr> <tr> <td>コミュニケーション</td> <td>言語 OK・言語あり言語不可・言語なし (%)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>指示理解・簡単な指示のみ理解・理解なし</td> </tr> <tr> <td>睡眠</td> <td>全自立・一部介助・全介助・おむつ使用 (%)</td> </tr> <tr> <td>食事介助</td> <td>全自立・一部介助・全介助・流動食等 (%)</td> </tr> <tr> <td>身体の障害・疾患</td> <td>なし・あり ()</td> </tr> </table>	パニック	あり・なし (あり⇒対応は%)	発達障害	あり・なし (あり⇒%)	聴覚	あり・なし (あり⇒%)	自閉	あり・なし (あり⇒%)	コミュニケーション	言語 OK・言語あり言語不可・言語なし (%)		指示理解・簡単な指示のみ理解・理解なし	睡眠	全自立・一部介助・全介助・おむつ使用 (%)	食事介助	全自立・一部介助・全介助・流動食等 (%)	身体の障害・疾患	なし・あり ()	<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>パニック →</p> <p>こんな状態のときは「パニック」です。混乱しています。</p> <p>対応のしかた</p> <p>考えられる原因・状況など</p>
	名前・団体名等	電話番号																																	
家族																																			
学校																																			
支援機関																																			
主治医 (病院名・医師名)																																			
パニック	あり・なし (あり⇒対応は%)																																		
発達障害	あり・なし (あり⇒%)																																		
聴覚	あり・なし (あり⇒%)																																		
自閉	あり・なし (あり⇒%)																																		
コミュニケーション	言語 OK・言語あり言語不可・言語なし (%)																																		
	指示理解・簡単な指示のみ理解・理解なし																																		
睡眠	全自立・一部介助・全介助・おむつ使用 (%)																																		
食事介助	全自立・一部介助・全介助・流動食等 (%)																																		
身体の障害・疾患	なし・あり ()																																		

<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>服薬 (ふだんのくすり) →</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>薬剤名</th> <th>1回量</th> <th>飲み方 (○をつける)</th> <th>何の薬?</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>朝・昼・夕</td> <td>錠</td> <td>食前・食後</td> <td></td> </tr> <tr> <td>寝る前</td> <td>錠</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>朝・昼・夕</td> <td>錠</td> <td>食前・食後</td> <td></td> </tr> <tr> <td>寝る前</td> <td>錠</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>朝・昼・夕</td> <td>錠</td> <td>食前・食後</td> <td></td> </tr> <tr> <td>寝る前</td> <td>錠</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>朝・昼・夕</td> <td>錠</td> <td>食前・食後</td> <td></td> </tr> <tr> <td>寝る前</td> <td>錠</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p style="font-size: x-small;">※特に飲み合わせの注意がある薬は、発作を起すことなど異なる薬は併用していません</p> <p>処方医名 (病院名) _____ 医師 _____</p>	薬剤名	1回量	飲み方 (○をつける)	何の薬?	朝・昼・夕	錠	食前・食後		寝る前	錠			朝・昼・夕	錠	食前・食後		寝る前	錠			朝・昼・夕	錠	食前・食後		寝る前	錠			朝・昼・夕	錠	食前・食後		寝る前	錠			<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>服薬 (のませかた) →</p> <p>自分で飲める・飲ませる (嫌がる・嫌がらない)</p> <p>飲ませ方</p> <p>禁忌食物・併用禁忌等</p>	<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>発作 (てんかん・ぜんそく・その他) →</p> <p>発作時の症状</p> <p>対応・処置</p> <p>発作が頻まった後の注意点・発作が起こりやすい条件など</p>
薬剤名	1回量	飲み方 (○をつける)	何の薬?																																			
朝・昼・夕	錠	食前・食後																																				
寝る前	錠																																					
朝・昼・夕	錠	食前・食後																																				
寝る前	錠																																					
朝・昼・夕	錠	食前・食後																																				
寝る前	錠																																					
朝・昼・夕	錠	食前・食後																																				
寝る前	錠																																					

<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>アレルギー・禁忌食物 →</p> <p>除去してほしい食物 (医薬上の禁忌も含む)</p> <p>小麦・牛乳・そば・大豆・落花生・甲殻類・魚卵・ナッツ キウイ・グレープフルーツ・納豆・やまいち その他 ()</p> <p>アナフィラキシーショックを起こしたことが ある・ない</p> <p>アレルギー時の症状</p> <p>じんましん・嘔吐・下痢・発熱・呼吸困難・その他</p> <p>その他のアレルギー</p> <p>花粉症・アトピー性皮膚炎・その他 ()</p>	<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>ことば・コミュニケーション? →</p> <p>トイレ⇒ ことばで伝える・身振りだけで伝える・伝えない (具体的に)</p> <p>空腹⇒ 言葉で訴える・身振りだけで訴える・不機嫌等の態度で訴える・伝えない (具体的に)</p> <p>体調の不良⇒ 言葉で訴える・身振りだけで訴える・態度や表情から判断する (具体的に)</p>	<p style="text-align: center;">なまえ【 】</p> <p>ことば・コミュニケーション? →</p> <p>特徴的な発声・発声・態度とそのニュアンス (例: 降りませ⇒降りたいの意 手を強く叩く⇒不機嫌・退席)</p>
---	--	---

<p style="text-align: center;">No. _____ さま</p> <p style="text-align: center;">介助・支援（食事）</p> <p>形態 普通食・やわらかめ・とろみ食・くたくた・流動食</p> <p>道具 はしOK・スプーンOK・食べさせる</p> <p>好き嫌い なし・あり（ ）</p> <p>その他食事介助の留意点</p>	<p style="text-align: center;">No. _____ さま</p> <p style="text-align: center;">介助・支援（排泄）</p> <p>小便 自立・半介助・全介助</p> <p>大便 自立・半介助・全介助</p> <p>おむつ 使用・使用しない</p> <p>おもらし ない・ある</p> <p>排泄介助のしかた・注意事項（女子は月経等の情報も）</p>	<p style="text-align: center;">No. _____ さま</p> <p style="text-align: center;">介助・支援（その他）</p> <p>その他の身体的介助（当てはまるものに○）</p> <p>歩行 介助が必要・不可（車椅子等）</p> <p>腕・手指 困難あり（ ）</p> <p>聴覚 ゆっくり話す・身振り・筆談・絵カード・手話</p> <p>視覚 眼鏡要 その他（ ）</p> <p>聴覚 聴覚障害（ ）</p> <p>具体的な介助方法・上記以外の身辺自立に関する情報</p>
---	--	--

<p style="text-align: center;">No. _____ さま</p> <p style="text-align: center;">落ち着くために</p> <p>好きな遊び・好きなこと</p> <p>嫌いなもの・苦手なもの</p> <p>接し方のポイント</p>	<p style="text-align: center;">No. _____ さま</p> <p style="text-align: center;">その他保護者から伝えたいこと</p>	
---	--	---

この子には障害があります。援助が必要です。

この子を見つけた方へ

しずかにゆっくりと声をかけてください。

呼び名は _____ です。

激しく興奮していたら無理になだめずようすをみてください。

歩ける程度に落ち着いたら

最寄りの交番、警察官、または消防署員、職員等に引き渡してください。


遺棄・消防等、保護して下さった機関の方へ

同時に、記載されている情報にしたがって保護をお願いいたします。

個人情報ですので取り扱いにはご注意ください

添付資料 3 たすけてカード啓発パンフレット

(実際は2つ折り)



たすけてストラップのモチーフは、三つ葉のクローバー
葉は、ハートの形をしています
家族の心、学校や支援者の心、地域の心
三つの心が手を携えて、子どもを守りたい
そんな願いを表すマークです

わたしたちの学校に通う子どもたちは
災害などで「いつもと違う」状況におかれたとき
ひとりでは、うまく行動することができません。

もしも、途方に暮れている子どもがいたら
少しのあいだ、その子に寄り添って
困難を乗り越えるお手伝いをしてください。

このストラップとカードは
そんな願いをこめて作ったものです。
どうぞ、よろしく願いいたします。

お問い合わせ

東京都立調布特別支援学校 PTA


〒182-8821 東京都調布市赤坂5-1-1 東京都立調布特別支援学校内
TEL 042-487-7221 FAX 042-481-0401
企画協力：リゾース・ネット
<http://www.husan.inf.soc.ac.jp/resource/>

イラスト：ネットは、東京都立調布特別支援学校と国立大学法人東京理科大学の協賛により
制作された、地域のたすけてカードの作成に協力したものです。
印刷：東京理科大学 印刷局 印刷センター

たすけてカードとストラップ 広報リーフレット

たすけてカード

もっています




災害、事故、迷子などの非常・緊急時
ひとりで取り残されて途方に暮れる子がいるとき
子どものかばんや持ち物に、このストラップがついていたら
その子は、支援を必要とする子です。
かばんの中に「たすけてカード」が入っています。
カードを見て、必要な支援を、ぜひ、お願いいたします。

「たすけてカード」は、
支援が必要な障害のある子どもが持つ、名前、所属、連絡先、障害特性、服装やアレルギーなど、保
護して下さった方がその子を支えるために必要な情報を記録したカードです。
たすけてストラップがついているかばんに入れて、子ども自身も持っています。
もしもとき、このカードをもとに、子どもたちを守ってください。

制作：東京都立調布特別支援学校PTA
企画協力：リゾース・ネット

災害時、障害のある子を保護したら...

私たちの子どもには、障害があります。
ひとりでは、非常時にはうまく行動できません。



私たちの学校に通う子どもは、30%障害や発達障害があります。ひとりで判断して行動することが難しく、援助が必要です。また、知らない人とのコミュニケーションに問題を抱えていて、自分の気持ちや状況をうまく伝えることができません。

東日本大震災では、東京都内でも大きな揺れを観測しました。また公共交通機関がストップし多数の方が帰宅困難となるなど、大きな混乱を経験しました。そして、いづれまた近いうちに、首都圏下や関東近郊で巨大地震が発生するとも言われています。

もし次の大地震がおきたとき、彼らが家族や関係者と一緒ならいいのですが、もし一人で通学している最中や、同行している家族などが死んだり大怪我をしたりして、ひとり取り残されてしまったら、どうしたらいいのでしょうか。

この子はどこの誰？どんな子？
この子をどう助けたら？

こんな情報が入っています

聞く、最初には子どもの名前や所属、年齢が記載されています。次に、その子を知っている人（家族、学校、支援機関など）の連絡先が記載されています。次のページには、障害の特性、医療的情報、生活上の行動特性などが「基本情報」として記載されています。「基本情報」の内容としてさらに詳しい情報は、次のページ以降に項目ごとに記載されています。

基本情報

氏名、性別、年齢、所属、連絡先

基本情報

障害の特性、医療的情報、生活上の行動特性

使い方

- このカードでは、子どもを最初に見つけた方に、警察、消防、駅などの公共交通機関、役所などの公共機関に子どもを連れて行っていただくようお願いしています。
- カードの外面裏面に「呼び名」が記載されています。子どもはその呼び名で呼んでください。
- カードは、透射封筒に入れて封印してあります。
- 保護された機関の方は、封印をはがして開封していただき、内容をよくご覧ください。連絡先が記載されていますので、上から順に連絡のつくところにご連絡ください。
- 関係者が到着するまでの間、カードの内容に即ちご支援をお願いいたします。

封封者署名

カードの内容は高度な個人情報にあたります。悪用を防止するため、封印し、封封者の署名を必要とする仕様となっております。関係者に引き渡すまでの間に、お手数ですがご署名または捺印をお願いいたします。

かばんを確かめてみてください

たすけてストラップがついていたら たすけてカードを持っています

